

本質的な豊かさの気付き

静岡県浜松市 中嶋健二

私たちは2014年6月27日から29日の三日間、水俣で様々なことを学んだ。その様々なことをここに記述しなければならないのだが、それが出来なくてかなりの間悩んでいた。

その間にも、週末学校のカリキュラムは怒涛のように流れていき、実は私たちはもう違うステップにいる。放置していたわけではないのだが、逃げていたのは事実だ。それはその三日間があまりに濃密過ぎて、触れなくなかったからだ。目一杯に膨らませた水風船のように、触れたら私の中で破裂してしまいそうで怖かったからだ。そして少し時間を置いた今、丁度いい大きさに収縮したように思う。それは決して感動が薄れたという否定的な意味ではなく、熟成され少し客観的に俯瞰することが可能になったという意味である。

レポートの詳細は恐らく他の参加者が丁寧に記述してくれていることを予想して、私は違う観点からこの三日間を振り返りたいと思う。即ち、この三日間を通して東京財団の方々及び吉本先生は私たちに何を訴えたかったのか。何を考えて欲しかったのかということだ。

私は大学生の頃、北九州を旅したことがあった。熊本には熊本市内と阿蘇山のみしか訪れていず、水俣は今回が初めてであった。初めてその地を踏み締めた時、私は地方の何処にでもある小さな町という印象を抱いた。新幹線の止まる新水俣駅は新しく綺麗ではあるが、周囲には何も無い。水俣市の中央も、狭い道路に民家やスーパー含め沢山建物が密集しているが、開発し切れていないこぢんまりとした町という印象が拭えなかった。他自治体と比較して、突出した観光や活気があるようには思えなかった。私の住む浜松の周囲の自治体で例えるのなら、丁度愛知県の豊橋市より少し小さく、若干活気の劣る町という印象を抱いた。

ただ、それは表面的な部分に過ぎなかった。この三日間で私たちが訪れたのはスイーツ店が並ぶ水俣中央商店街であり、漁業を営み海のすぐ近くに位置する杉本水産であり、山奥に佇む古い日本を思わせる頭石村であった。それらいずれにも共通することは、そこに携わっている方々がとても元気であることだった。行政と市民の当事者同士の言葉を聞かせて貰ったが、紆余曲折があったものの、互いに尊重し合い、高め合う関係であった。冗談を言い合い、笑顔が絶えないそんな人ばかりだった。Win-winの関係というのを私は初めて見たような気がした。

確かに日本の人口は既に減少に転じているのだから、絶対数で言えば地方は余計に人が少なく、なおかつ老人が多いのである。それ故に、活気が無いように私は誤解していた。しかし、水俣に住む方々は実に豊かに幸せに暮らしているのであった。自分たちの仕事に誇りを持ち、只管商業主義に走るのではなく、どうしたら生きがいを持って前へ進めるのか。その点に皆の関心がしっかり共有されているように感じた。人が沢山いて、行列が出来ることが活気ではない。私自身もそういったものは嫌いであるはずなのに、人がいて賑わうことが活気であると誤解していた。活気とは、本来は充実性のことである。そこに暮らす人々から笑顔が漏れ出る様子のことであったと気付かされた。

そして、そのいずれにも関わっていたのが吉本先生であった。関わり方が、水俣市役所の方を関してと、間接的である場合もあったが、その方は吉本先生から地元学を学び、その方法で市民に関わっていた。つまり、元気になるきっかけを作っていたのは吉本先生であることは間違いなかった。

この三日間を通して私が思ったことは、地方自治の本質とはその地域に暮らす人々の笑顔であるということだ。幾ら雇用が有り、経済的に豊かになっても暗い表情の人間は幾らでもいる。翻って水俣では、人々は地域で暮らし、そこで育まれるものを食べ、議論して、時にはぶつかり合いながら溢れ出る笑顔を共有していた。私たち地方公務員は、そんな笑顔が溢れる環境になるよう地域の手助けをするのが仕

事なのではないだろうか。決して主導で、ワンマンを行うのではなく、意見を共有しながら、同じ地域に暮らす人々が笑顔になれる助力となるのが私たちの仕事なのではないか。そして、それは例え一人の人間からでも出来ることなのではないか。それをこの三日間で東京財団の方々と吉本先生は私たちに伝えたかったのではないか。そんなことを私は感じた。

高度経済成長期以降、私たち日本人は豊かさの意味を履き違えてしまった。誤魔化しの無い笑顔こそ、人間の幸福の本質であり、その環境へ導く手伝いをするのが私たち公務員のすべき仕事だと強く感じた。